

水のほとりに

彼は水のほとりに植えられた木
暑さが襲うのを見ることなく
その葉は青々としている
(エレミヤ書 17:8)



東北学院礼拝説教集
第1号

2021年4月1日
東北学院宗教センター発行

水のほとりに

東北学院礼拝説教集

第1号

2021年4月1日

東北学院宗教センター発行

目次

発行にあたって	宗教センター長・主任	野村 信	4
神さま、ありがとう	東北学院幼稚園園長	島内 久美子	7
救いの希望	東北学院中学校・高等学校宗教主任	松井 浩樹	11
神の愛による希望	東北学院榴ヶ岡高等学校宗教主任	西間木 順	15
押川方義の学問と信仰の特徴	院長・学長・宗教センター所長	大西 晴樹	21
畑の中に隠された宝	宗教センター長・主任	野村 信	29
人生の意味	総合人文学科長	川島 堅二	35
必要なことはただ一つ	大学宗教主任	出村 みや子	41

御言葉はあなたの近くに

大学宗教主任 木村純二 …… 47

「仕える」生き方

大学宗教主任 吉田新 …… 55

地の平和

大学宗教主任 田島卓 …… 61

行きなさい、神の示す地へ

大学宗教主任 阿久戸義愛 …… 67

起き上がりなさい

大学宗教主任 藤野雄大 …… 73

あなたがたはすべて光の子

総合人文学科教授 鐸木道剛 …… 79

もう、恐れなくていい

日本基督教団
仙台東一番丁教会牧師 瀬谷寛 …… 87

不思議なクリスマス

日本基督教団
東和歌山教会牧師 阿部倫太郎 …… 93

あとがき

宗教センター長・
野村信 …… 98

発行にあたって

『東北学院礼拝説教集』は、東北学院の各学校の礼拝で語られた説教を収録したものです。幼稚園、中学校、高等学校、大学では、短い時間ですが、毎日礼拝が行われ、そこでは聖書の教えが説き明かされています。今まで、大学を除く各学校の礼拝説教を活字にする企画を立てたことはありませんが、二〇二〇年四月より東北学院宗教センターが発足し、各学校のキリスト教活動をつなぐ働きを開始しましたので、礼拝で語られる説教もこうして一冊の小冊子にまとめることが可能になりました。園児、生徒、学生だけでなく、保護者の皆様や一般の方々にも本学院が大切に行っている礼拝での聖書の説き明かしに触れ、ご理解いただける機会となれば幸いに存じます。なお、本書に寄稿された先生方の身分は昨年度のものであることをご了承ください。大学ではすでに『大学礼拝説教集』を第二四号まで発行しましたが、これからは大学礼拝で語られた説教は本説教集に掲載いたします。

副題は、「水のほとりに」としました。聖書の中にしばしば登場する大切な言葉です。旧約聖書では、詩編第二三篇二節にある言葉が有名ですが、本冊子の表紙では、主イエスの御姿を髣髴させるエレミヤ書一七章八節を引用しました。いずれにせよ、聖書の執筆されたカナン地方（現在のパレスチナ）では、「水」が生死を分け、繁栄・衰退を決定しました。もちろんこの「水」とは、水分の補給という意味だけではなく、「命の水」という深い意味を有しています。

新約聖書で、主イエスが「生きた水」（ヨハネ四：一〇）と言われた時、それは人間の喉の渇きをいやす水ではなく、神の「永遠の命に至る水」（同：一四）を指しました。すなわち、心を潤し、神の貴い養いにあずかる「水」のことです。なお「水のほとりに」は副題ですから、一、二、三年後に新しい題に変更する予定です。聖書には私たちに必要なあらゆる教えが満ちていますから、時機にあわせてふさわしい言葉を選びたいと考えています。

本学院は、一八八六年に米国から来仙した宣教師ウイリアムE. ホーイ先生と仙台で伝道活動を開始していた押川方義先生、それにD. B. シュネーダー先生たちの篤い志によって設立された仙台神学校から始まります。先生方は、聖書の教えである、LIFE LIGHT LOVE「命」「光」「愛」をモットーに、学校教育を開始しました。本年二〇二一年は創立百三十五周年にあたります。これからも本学院がこのモットーを固く据え、さらに豊かに発展していけるようお願い、この説教集がその願いの一端を少しでも担えればまことに幸いであると存じます。



神さま、ありがとう

東北学院幼稚園園長 島内 久美子

マタイによる福音書 六章二五〜三〇節

25だから、言^いつておく。自^じ分^{ぶん}の命^{いのち}のこ^ことで何^{なに}を食^たべようか何^{なに}を飲^のもうかと、また自^じ分^{ぶん}の体^{からだ}のこ^ことで何^{なに}を着^きようかと思^{おも}い悩^{なや}むな。命^{いのち}は食^たべ物^{もの}よりも大^{たい}切^{せつ}であり、体^{からだ}は衣^い服^{ふく}よりも大^{たい}切^{せつ}ではないか。26空^{そら}の鳥^{とり}をよく見^みなさい。種^{たね}も蒔^まかず、刈^かり入^いれもせず、倉^{くら}に納^{おさ}めもしない。だ^が、あ^なた^がの天^{てん}の父^{ちち}は鳥^{とり}を養^{やしな}ってください。あ^なた^がの鳥^{とり}よりも価^か値^ちあるものではないか。27あ^なた^がのう^ちだ^れが、思^{おも}い悩^{なや}んだからとい^いつて、寿^{じゆみよう}命^{めい}をわ^ずかでも延^のばすこ^ことがで^きようか。28な^ぜ、衣^い服^{ふく}のこ^ことで思^{おも}い悩^{なや}むか。野^のの花^{はな}がど^どのよう^{よう}に育^{そだ}つのか、注^{ちゆうい}意^いして見^みなさい。働^{はたら}きもせず、紡^{つむ}ぎもしない。29し^かし、言^いつておく。栄^{えい}華^がを極^{きわ}めたソ^ろロ^ろモンでさ^え、この花^{はな}の^いつ^いつ^いほ^ほどにも着^き飾^{かざ}つては^いな^なかつた。30今^{きま}日^{じつ}は生^はえてい^いて、明^あ日^{じつ}は炉^ろに投^なげ込^こまれる野^のの草^{くさ}でさ^え、神^{かみ}は^いの^よう^うに装^{よそお}つて^くだ^さる。ま^まして、あ^なた^がに^はな^なお^おさ^さら^のこ^こと^とでは^いな^ないか、信^{しん}仰^{かう}の薄^{うす}い者^{もの}たち^ちよ。

みなさんは、空を飛んでいる「鳥」を見たことがあると思うけど、

「鳥」の名前を知っていますか。どんな鳥の名前を知っているかな？

そうだね、「スズメ」とか、「カラス」とかいるよね。ほかにも知っていますか。「つばめ」とか、「わし」もいるよね。

イエスさまは、鳥が大好きです。イエスさまはちいさなスズメでも、とても大切にしてくださいます（ルカ二・六）。だから、おおぜいの人たちに、お話をされた時に、「みなさん、空の鳥をよく見なさい」とおっしゃったのです。「神さまが鳥たちをととても大切にしていますよ。鳥たちは、畑で野菜を作ったり、お家でご飯を作って食べなくても、いつも神さまが食べ物を与えてくださって元気に空を飛び回り、大きくなることができます。それは神さまがそだててくださっているのですよ」と、言われました。

みなさんは、お家のお庭とか、幼稚園の花壇で「お花」を見たことがあると思うけど、「お花」の名前を知っていますか。どんなお花の名前を知っているかな？ そうだね、「チューリップ」とか「タンポポ」とか、いま咲いているよね。ほかにも知っていますか。「あさがお」とか「ひまわり」も夏に咲いているよね。

イエスさまは、お花が大好きです。イエスさまは「ゆりの花はとてもきれいですね」と言われました。だから、おおぜいの人たちに、お話をされた時に、「みなさん、野の花をよく見なさい」とおっしゃったのです。「神さまはお花を大切にしていますよ。お花はお化粧したり、きれいな服を着たりし

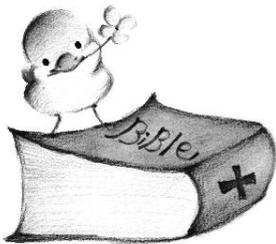
なくても、いつも美しく咲きます。それは神さまが育ててくださっているからですよ」と、言われました。

鳥もお花も神さまが作ってくださいました。そしてわたしたちもお家の人も神さまが作ってくださいました。みんな神さまに大切に守られて大きくなることができます。だから今日も元気に幼稚園に来ることができました。みんなで、神さまのお話をきけること、歌をうたい、お庭でお友だちと楽しく遊べることを「神さまありがとうございます。」とおいのりしましょう。

祈り

天の神さま、イエスさまが大好きな鳥やお花がわたしたちも大好きです。そしてイエスさまは、わたしたちも大好きといってくださいます。神さま、ありがとうございます。きょうも元気にお友だちと一緒に、楽しく遊ぶことができますように。今日、お休みしているお友だちが、明日は元気に幼稚園に来ることが出来るようにお家にいるお友だちのこともお守りください。

このおいのりをイエスさまのお名前をとおしておささげします。アーメン





救いの希望

東北学院中学校・高等学校宗教学主任 松井浩樹

ルカによる福音書 九章二七～四五節

37翌日、一同が山を下りると、大勢の群衆がイエスを出迎えた。38そのとき、一人の男が群衆の中から大声で言った。「先生、どうかわたしの子を見てやってください。一人息子です。39悪霊が取りつくと、この子は突然叫びだします。悪霊はこの子にけいれんを起こさせて泡を吹かせ、さんざん苦しめて、なかなか離れません。40この霊を追い出してください。お弟子たちにお頼みしましたが、できませんでした。」41イエスはお答えになった。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしは、あなたがたと共にいて、あなたがたに我慢しなければならぬのか。あなたの子供をここに連れて来なさい。」42その子が来る途中で、悪霊は投げ倒し、引きつけさせた。イエスは汚れた霊を叱り、子供をいやして父親にお返しになった。43人々は皆、神の偉大さに心を打たれた。44イエスがなさったすべてのことに、皆が驚いていると、イエスは弟子たちに言われた。「この言葉をよく耳に入れておきなさい。人の子は人々の手に引き渡されようとしている。」45弟子たちはその言葉が分からなかった。彼らには理解できないように隠されていたのである。彼らは、怖くてその言葉について尋ねられなかった。

今日の冒頭部分「一同が山を降りると」とあります。この「一同」とは誰のことでしょうか。それは直前の箇所から推測できます。山に登っていた主イエス、とペトロとヤコブとヨハネです。主イエスはこの三人に限定した弟子を連れて山に登っておられました。他の弟子たちは麓ふもとで待っていたのでしよう。山から下りてきた四人が、その待っていた人々のところに来たのです。

大切な一人息子が重い病にて、大変な状況になっている様が手に取るように分かります。ルカの職業は医者であることが知られていますから、その描写の巧みさは際立っています。その重い病とは、原文によりますと「けいれん・泡を吹く・苦しめる」とありますから、現代で言うところの「てんかん」のようです。その有様を当時のユダヤ社会では「悪霊がとりついた」と理解をしたようであります。想像するに、この「てんかん」を患わづらっているのは、年の頃幼稚園くらい、せいぜい小学校の低学年、てんかんはもちろんですが、そもそも生まれつき体が弱く病気がちであったと思われれます。ですから、そのたびに医者に診てもらっていた。ところが今回の発作は途方に暮れるほどひどく、この一人息子の病に父親は、このままでは死んでしまうかも知れないと心配でたまらず主イエスのところに来たのです。

主イエスは言いました。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか」。そして最後には「人の子は人々の手に引き渡されようとしている」とお語りになり、神への信頼に欠ける人々に思わず洩もれた嘆きの言葉を発しておられます。そして物語の結末は、主イエスによって一人息子は癒いよされるのでありますが、それだけでは終わることなく続いて、その主イエスの弟子たちに目を向けています。今日の最後の部分四五節に、弟子たちはその「主イエスの発した言葉が分からなかった」という終わりかたをするの

です。つまり、今日のこの記事だけを読むならば中心テーマは難病を癒やした救い主イエス「奇跡物語の主イエス」ではなく、私たち人間の側の不信仰というのがテーマであるのです。そして私たちが不信仰である、同時にその私たちが生きている、この時代そのものも不信仰である。だから、「主イエスが十字架にかかることへの予告」へと話は続くのです。もう少し言いますと、主イエスがその不信仰ゆえに十字架に赴かなければならなかったということでもあります。

私たち自身、またその私たちが生きるこの時代も今も確かに、私自身を含めて「立派な信仰」なんて持ち合わせてはいません。周りを見渡すと様々な問題が現代社会にのしかかっています。しかし聖書が語ること、それはキリストが指し示す「救いの希望」であります。悲しい時、嬉しい時、楽しい時、どんな時であれ目には見えませんが今も時と場をこえて親しく私達と共に歩まれているからであります。そのキリストに支えられ、生かされて生きていることを覚えたいと思います。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。

新しい命が与えられ、礼拝をささげ今日の一日を始められます幸いです感謝いたします。大きな希望のもと、今日の一日が御心になうものとなりますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。



神の愛による希望

東北学院榴ヶ岡高等学校宗教主任

西間木

順

ローマの信徒への手紙 五章五節

5 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

「誰かから自分が認められている、愛されている」と私たちは感じる事ができると、生きる力が湧いてきます。将来に対する希望を持つことができます。困難を乗り越える力が湧いてくるのです。愛は、私たちが生きていく上で、大きな力となります。

聖書には、神が私たち一人ひとりをどんなときにも見捨てることなく、愛してくださっている、と書かれています。私たち一人ひとりに、「あなたはわたしにとってかけがえない存在ですよ」という神のメッセージが書かれています。そのことが、主イエスによって明らかにされているのです。神から愛されていることは、神から信頼されていることと同じことなのです。

聖書を通して、私たちは神から愛されていることに気づきたいのです。別の言い方をすれば、「神の愛が、私たちの心に注がれている」ことに気づきたいのです。その神の愛は、私たちに生きる力、希望をもたらしてくれるのです。そればかりではなく、新しい生き方をするようにと私たちを促してくれるのです。つまりそれぞれの心に注がれている神の愛を用いて、他者と接するのです。隣人への愛を実践していくのです。

今日、共にお読みしました、ローマの信徒への手紙五章五節は、今年度の聖句です。この手紙を書いたパウロは、「苦難の中にあっても、希望を持つこと」の大切さを教えてくれます。希望が失望になることはありません。なぜなら、私たちは神から愛されている、神の愛が私たちの心に注がれている、そしてその神の愛が私たちの行動を変え、希望へと進んでいく力が与えられるからです。聖書を通して神の愛に気づき、希望を持って、この学校での学びを続けていきましょう。

最後にローマの信徒への手紙五章一節からお読みします。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導きいれられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりではなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

祈り

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができすことを感謝いたします。

どうぞ、私たちの心の中に、あなたの愛が注がれていることに気づくことができますように。

そしてその愛によって、私たち一人ひとりが希望を持つことができますように。

今、この場におりません友のために祈る心を与えてください。

この学校に集うすべての者が、あなたの愛を用いて、互いに接し、今日もこの学校に来てよかったと思える一日に共にしていくことができますように。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。
この祈り 尊いわれらの主 イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン



東北学院榴ヶ岡高等学校 礼拝堂



押川方義の学問と信仰の特徴

院長・学長・宗教センター所長 大西晴樹

ペトロの手紙一 二章一七節

17 すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい。

今日は、東北学院の創設者の一人で、初代院長の押川方義についてお話しすることにしましょう。押川は、創立記念日の際に、東北学院ラーハウザー記念礼拝堂に三人の校祖の肖像画が並びますが、ウィリアム・ホーイ宣教師と一緒に東北学院を創設しました。その押川の生き方を象徴的に示した聖書の箇所が先ほど読んだペトロの手紙第二章一七節、「神を愛し、皇帝を敬いなさい」であり、「皇帝」とは、押川にとって「天皇」のことであり、東北学院を辞したのち、ナシヨナリストとして活動する押川の生涯について、いいえて妙な箇所だと思えます。今日の礼拝は、その押川方義の青春時代におけるキリスト教への改宗についてお話しすることによって、押川における学問と信仰の特徴を明らかにしてみたいと思えます。

押川方義は、一八五〇年、明治維新が一八六八年ですから、幕末に伊予松山藩の下級武士橋本昌之の三男として松山城下に生まれたのです。十一歳のころ、同じく松山藩士押川方至の養子となり、押川姓を名乗るようになります。問題は、伊予松山藩が、徳川の親戚筋にあたる久松松平氏十五代の居城であったという点です。列記とした親藩大名であり、これが押川方義の人生を大きく変えることになりました。明治維新は、外様大名にして、西国雄藩である薩摩・長州が中心に兵をあげ、内戦により江戸の徳川幕府を打倒することによって起こりました。松山藩は、親藩ですから当然幕府側につききました。方義が十五歳の時、実父橋本昌之が、自らの命を刃物で断つ、自刃じじんしました。藩の意見が、幕府に反発する攘夷か、幕府を支持する恭順かに分かれ、その間で苦しんでいたことだといわれています。一八六七年十七歳のとき、第二次長州征伐に参戦したといわれています。そのとき、松山藩は瀬戸大島に上陸し、

長州軍は、最新式のエンフィールド銃をもった奇兵隊が迎え撃ち、他方、火繩銃や旧式のゲーベル銃しかもたない松山藩兵は惨敗しました。エンフィールド銃は、火繩銃の数倍の射程と高い精度を持っており、火繩銃が攻撃を再開するのに十三分かかるのに対して、その間三十回撃つことができ、勝敗は明白でした。方義は、「勝てば官軍、負ければ賊軍」という結果の前に「賊軍」という汚名を着せられて、明治という新しい時代を生きていかなければなりません。また、西洋からの文明や技術は、「尊王攘夷」などと言って争ってはられないほどの、圧倒的なパワーを方義に突き付けたのです。

方義は、松山藩の藩校明教館で漢学を学んでいましたが、薩長に敗れてからは、洋学（英学）を学ぶようになりました。明治に入って二年目の一級十九歳の時、選拔された十九名のうちの一人として藩命を受けて東京遊学を命じられました。すでに結婚していた方義は、妻子を松山に置いて、東京に向かいます。そのころ江戸留学の英学生は、福沢諭吉の慶應義塾か、箕作秋坪の三又学舎みつりしゅうへいで学ぶのですが、方義は三又学舎で英学の学びをスタートします。そこで、西洋史を学んでナポレオンに傾倒し、晩年まで西郷隆盛とナポレオンを尊敬し、晩年の愛馬の名前はナポレオンと名付けるほどでした。一八七〇年二十歳の時、東京大学の前身大学南校へ進学します。この高等教育機関は、各藩からの派遣学生のレベルがまちまちであった貢進生制度が上手くいかず、解散してしまいました。当時校長は、フルベッキというアメリカ・オランダ改革教会の宣教師で、上京する前は、長崎で大隈重信に聖書と外国憲法を教えしていました。そのせいか、方義は、外国人教師から直接「西洋事情」を学びたいと思い、横浜で学ぶことにしました。

横浜に移った方義は、方義自身の言葉づかいで言えば、「完全に実用的な英語」を身に着けるために、藩主の許可を得て横浜修文館という学校に入りました。そこで、J. H. バラ、S. R. ブラウンというアメリカ・オランダ改革教会の宣教師について英語を学ぶことにしたのです。当時はまだ、英語を教えてくれる大学があったわけではありません。英語を学びたいという青年は、宣教師の塾に入って「完全で実用的な英語」を身に着けようとしたのです。実際に、宣教師たちの英語教育は先進的で、ブラウンの教授法は、ブラウンのマカオでの十年に亘る中国人に対する英語教育の成果、すなわち、英語教育はプライマリー、インターメディアエイト、アドヴァンスドという順序を踏んで教えられなければならず、ブラウンが記した教科書『日英会話篇』は、実用的な英会話の用例を分かりやすく例示したものでした。先ほど早稲田の創立者大隈重信に聖書と外国憲法を教えたのがフルベッキだという話をしましたが、慶應義塾の福沢諭吉は、イギリス聖公会の宣教師を三田の山に住まわせて英学を盛んにしました。とくに、方義ら「賊軍」の汚名を着せられた佐幕派出身の青年たちは、英語を一生懸命勉強しました。薩長出身の青年たちが明治政府の役人になり、立身出世して藩閥政治を形成していくのに対して、英語によって「賊軍」の汚名を晴らし、新しい日本を建設してやろうという復讐心に燃えた想いがあったのです。東北地方は、皆さん承知の通り、三一藩からなる奥羽越列藩同盟を結成し、最後まで、薩長の新政府軍と戦いました。会津藩出身で明治学院総理となる井深梶之介、津軽藩出身で青山学院院长となる本多庸一ら、方義の仲間として横浜において、宣教師から英語を学んだ青年たちが多くいます。それと不思議なことに、仙台藩からは、後に日本で最初の本格的な日本語辞典『玄海』を編集する大槻文彦が

押川と同様に、三叉学舎、大学南校、修文館で英語を学んでいます。大槻文彦は、のちに宮城県尋常中学校（県立仙台一高の前身）の校長となり、その胸像が仙台一高にあります。仙台に東北学院を創設した押川方義との不思議な因縁を感じます。

さて、横浜で押川が学んだのは英語だけではありませんでした。方義は、横浜修文館で英語を学ぶ傍ら、日本ではまだ、鎖国以来二百五十年間続く「キリシタン禁制の高札」が掲げられていた時に、若い宣教師であるJ. H. バラの塾、実際には、聖書を学び、説教や祈祷会があるような私塾ですが、そこに参加するようになったのです。そのバラの塾から、日本で最初のプロテスタント教会（横浜公会と呼ばれています）が生まれました。一八七二（明治五）年、二月、バラより洗礼を受けた八名の青年たちの中に、押川方義の名前が刻まれています。では、なぜ方義は、そこまで深くキリスト教の信仰と関わるようになったのでしょうか。仙台神学校が東北学院に改組される際の私立学校設置願に添付された押川の「履歴書」には、「明治四年横浜英学校入学、バラ、ブラウン、タムソン、ルミス、ミラルの諸氏に就き英学修業」と述べられています。これは、先に述べた横浜修文館での学びのことを示しています。その後の「明治七年横浜英学校主幹となる」という一文には、注意が必要です。そのころクリスマスチャンになっていた方義は、ブラウン宣教師のもとで、明治六年八月から始まった牧師養成の役割を果たすブラウン神学塾の学生代表のごとき地位にあったということになります。

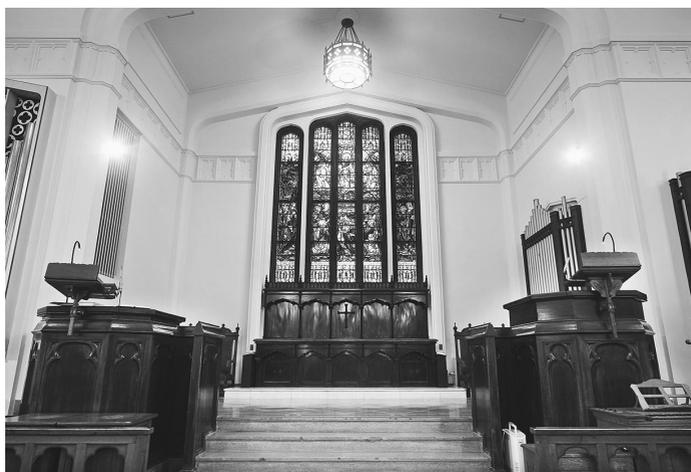
押川は、ブラウンやバラから英語を学ぶ中で、彼らの人格に触れ、彼らのキリスト教信仰を受け入れるようになりました。中国でのブラウンの考え方は、「中国のキリスト教伝道は中国人の手で」という

考え方ですから、当然方義の「賊軍」の汚名を晴らし、新しい日本を建設してやろうという復讐心と微妙に重なるでしょうし、バラの祈祷会での祈り、「神よ、わが日本を救い給え」という言葉は方義の心を決定的に揺り動かし、キリスト教こそはこの日本を救う唯一の宗教であるとの確信を呼び起こしたのではないのでしょうか。私は、東北学院長を辞任した後、ナショナリズムの下に日本人改造論、日本改造論を唱え、大アジア主義へと飛躍していった押川方義の信仰を考えると、キリスト教が果たす救済には、個人の心の救済のみならず、国家の救済という部分があったのだということをおぼろしく忘れることはできないのだと考えます。それが、実の父親を藩論の分裂によって失い、戊申戦争で「賊軍」の汚名を着せられた青年が、世界に開かれた時代を懸命に生きる中で、得ることのできた答えだったのではないのでしょうか。

祈り

神様、私たちは、現在コロナ禍の中の危機の時代を生きております。その中で、人間の救済とは何か、国家の役割とは何かを考え、答えを求めて歩んでいくことができますよう、押川方義を創設者の一人とするこの東北学院大学において、顧みてください。アーメン

(二〇二〇年十月五日 東北学院ラーハウザー記念礼拝堂における大学礼拝)



東北学院ラーハウザー記念礼拝堂



畑の中に隠された宝

宗教部長・宗教センター主任 野村 信

マタイによる福音書 一三章四四節

44 天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

ただいまお読みしました聖書の箇所は、天の国について、主イエス・キリストが語られた譬え話です。天国、神の国という世界は、地上の国ではありませんので、私たちの知っている常識や物差しでは、説明の出来ない世界であり、主イエスは常に譬えを用いて、人々に語ってくださいました。

この譬えは、一読しただけで、何が言いたいのかすぐに分かる、明確な譬えです。誰でも、畑の中に宝が隠されていることに気づいた人は、その畑を自分のものになりたいと思うものです。

さて、今日は、少し、この譬え話に集中して、深く考えてみたいと思います。考えてみるとこの簡単な譬えの中に、色々なことが暗示されていることに気づきます。

まず主イエスが、畑を持ち出して説明されている点です。わざわざ畑に隠されている譬えでなくてもよかったのに、畑が舞台になっているところが暗示的です。

つまり、畑は確かに食料を得るために大切なものですが、どこにでもある日常の風景であるわけです。ごく普通の、見慣れた、平凡な毎日の中に、実はとても大切な何かが隠されているということでしょう。日常生活の中に非日常が隠されていると。

主イエスは、私たちが主イエス・キリストを信じて、従っていこうとすれば、私たちに告げられる天国とは、一見、ありふれていて、しかも外見においては、特に代わり映えのしない平凡な生活の中にあることを示唆しています。確かにクリスマスチャンになったら急に金持ちになったとか、病気が治って健康になったとか、幸福が舞い込んできたなど、そういううまい話はないわけです。

むしろ、クリスマスチャンもごく普通の日常生活を送ります。平凡な毎日です。年取ればそれ相応に老

け、いずれ誰もみな同じように死んでいきます。それは、まさにどこにでもある畑のように、取り立てて喜んだり、ほめたたえたりするようなことのない日常です。しかし、その普段生活の中に宝は隠されているのです。

むしろ、私たちは、この譬えから、学び取らねばなりません。すなわち、私たちの日常のありふれた中に、神の国は横たわっていて、それに気づかなければならない、と。いつもと違う目をもって自分の生活や自分自身を見つめ直さなければならぬと言われているのではないのでしょうか。

パウロという主イエス・キリストに後から従った弟子がいます。いくつもの手紙を書いた伝道者でしたが、パウロは、「私たちは、土の器に宝を収めています。」と言っています。土の器ですから、金でも銀でも、鉄でもなく、もろく、こわれやすい土の器の中に宝が宿っているということです。それは私たち自身を指します。壊れやすい、欠けて、ヒビの入った器なのに、そこに宝が収められているというわけです。器は、見栄えはしないけれど、またキリストの譬えでいうなら、畑はありふれているけれど、その中に宝が輝いているわけです。

考えてみると、キリストの十字架の出来事そのものが、結局、何も良いものはなかった、がっかりだ、と言えるような、やせた畑であり、こわれた器だったのです。忠実に従ってきた十二人の弟子たちには何の報酬も与えられず、大勢の民衆の期待に十分に応じることもなく、ローマ帝国から民族の独立を勝ち取るわけでもなく、無残にも討ち死にしまいました。やれやれ、今度はこちらの身が危ない。さっさと逃げていくのが一番、と言って弟子たちはみな逃走したのです。それはかつて登場した預言者

たちも同じ末路をたどり、正しいことを言って始末された人々と同様であり、誰も彼もみな同じ、結局、みんな死んで、後には、やはりだめだった、という虚しさ、あきらめが残るのです。

しかし、ある人々は気が付きました。キリストの十字架という、悲惨で、敗北の死が、旧約聖書で預言されていた大いなる犠牲の死、人類の罪をとりなす贖いの死であり、さらに復活によって、人類に新しい希望と時代を到来させる、神の偉大なる計画であったということを悟ったのです。天国の宝が人類に提供されたのだ、ということに気づきました。そして、これに気づいた人々は語りだしたのです。あの十字架で死んだイエスは、人類の救い主であると。

それはあたかも畑の中に宝が隠されている、あるいは、土の器の中に宝が宿っているようなものと言えるのです。主イエスの敗北の死の中に、人類の救いという宝が隠されていると。それから、教会が各地に建てられ、聖書が編纂され、新約聖書時代が到来することになりました。各地にいかなる迫害をも恐れないキリスト者たちが誕生し、ついに、三百年後にはローマ帝国がキリスト教国になるという途方もない出来事が人類の歴史に刻まれることになりました。

今も、このたとえ話は、私たちに問いかけています。あなたの代わり映えのしない、ごく普通の、平凡な日常生活の中に、宝が隠されていると。ふと立ち止まり、少し、いつもと違うまなざしで、世界と自分自身を見つめてごらん、と。日常生活の中に非日常が横たわっており、何の代わり映えのしない平凡な毎日の中に非凡さが隠されていると。

コロナウイルスで、ますます気がふさがれ、重苦しい日常生活を今、私たちは強いられています。神

はどこにいったのか。何もしてくれないのか、と、また大震災の時に口にした不満をここで思いたくならないような状況に置かれています。

しかし、少し眼差しを変え、耳をそばだて、聖書を読み、人類の歴史を振り返り、さらに未来を見つめると、大切なものが私たちの傍らにあるということに気づかないでしょうか。

主イエス・キリストは、私たちの普通の、平凡な毎日の中に、とてもかけがえのない宝、全財産を売り払ってでも、惜しくない宝がある、と教えてくれています。今、その宝に思いを傾け、そこから大きな力、勇気、希望を見出して、さらに進んでいきますようにお祈りいたします。

(二〇二〇年十一月二日 大学礼拝説教)



人生の意味

総合人文学科長
川島 堅 二

コヘレトの言葉 一章一二〜一四節

¹²わたしコヘレトはイスラエルの王としてエルサレムにいた。

¹³天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた。神はつらいことを人の子らの務めとなさったものだ。

¹⁴わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであつた。

現在の新共同訳聖書で「コヘレトの言葉」と訳されている書は、以前は「伝道の書」と呼ばれていました。これは七〇人訳というギリシヤ語訳の旧約聖書でこの書が「エクレシアステース」、すなわち「エクレシア（教会・集会）で語る者」と訳されていたので、古くは宗教改革者マルチン・ルターがこの書を「説教者」「伝道者」を意味する「プレーディガー」とドイツ語に訳したところから、日本語訳でも「伝道者の言葉」「伝道の書」と訳されたのです。

しかし、最近の研究では、コヘレトは知恵者と称えられたソロモン王を模したペンネーム、固有名詞だとされるため、新共同訳聖書では、旧約聖書のヘブル語をそのまま音写して「コヘレトの言葉」としています。

そのような本書の内容を一言でいうと「人生の意味」ということになると思います。この書ではおよそ人間が、人生の意味として思いつくあらゆる事態、可能性が探求されているからです。

コヘレトはまず禁欲的に知識や学問を究めたといっています。

「わたしは（中略）知恵を深め（中略）知識を深く見極めた」（一・一六）。しかし、それは「風を追うようなこと」（一・一七）だった。

次に、振り子が真逆に触れて正反対の快樂主義に走ります。

「快樂を追ってみよう。愉悦に浸ってみよう」（二・一）そういつて、コヘレトは「酒と愚行」（二・三）、大邸宅（庭園やいくつもの池）、大事業（畑や果樹園）、男女の奴隸、牛、羊などの財産の所有（二・七）、金銀財宝、男女の歌い手、多くの側室（二・八）を所有し、「目に望ましく映るものは何ひ

とつ拒まず手に入れ、どのような快樂をも余さず試みた」と豪語します(二・一〇)。

しかしながら、その結果、コヘレトがたどり着くのは諸行無常の仏教的人生觀に近い心境です。

「しかし、わたしは知っている。両者(賢者と愚者)に同じことが起こる。(中略)すべて忘れられてしまふ。」(二・一四〜一六)

その後、コヘレトはさらに悲觀的な人生觀に転じていきます。

人間も動物に過ぎない(三・一八〜二二)

すでに死んだ人は幸いだ。生まれてこなかった者はもつと幸い(四・一〜三)

人の心は悪に満ち、思いは狂っている(九・三)

こうしたおよそ人間が考えつく限りの人生觀を総覽することで、結局のところコヘレトがたどり着く人生の意味、幸福とは、自分の受けた人生を度を越えず、ほどほどに楽しめということです。

「自分で食べて、自分で味わえ」(二・二四〜二五)

「私は知った。人間にとって最も幸福なのは、喜び楽しんで一生を送ることだ」(三・一二)

「人間にとって最も幸福なのは、自分の業によって楽しみを得ることだ」(三・二二)

「短い人生の日々に、飲み食いし、太陽の下で労苦した結果のすべてに満足することこそ、幸福でよいことだ。(中略)神から富や財宝をいただいた人は皆、それを享受し、自らの分をわきまえて、その労苦の結果を楽しむように定められている」(五・一七〜一八)

「それゆえわたしは快樂をたたえる」(八・一五)

「さあ、喜んであなたのパンを食べ、気持ちよくあなたの酒を飲むがよい。(中略) 太陽の下、与えられた空しい人生の日々、愛する妻とともに楽しく生きるがよい」(九・七〇九)

もし、コヘレトの言葉の内容が以上に尽きるものであれば、それは、人間のあらゆる人生哲学、禁欲主義から快樂主義、そして生まれてこない方がよかったという悲観主義を経て、分をわきまえてほどほどに楽しむという現実主義の勧めで終わる、面白くはあっても、信仰の書である聖書に収められる価値のある書とは思えません。

しかし、以上のような人間の自己実現や、幸福追求の思想、これを総じて人間から出発する、人間を主語とする人生観、世界観だとすると、それらを上から垂直に断ち切るように、全く異質の思想が、コヘレトの言葉の随所にキラリキラリと散りばめられているのです。そのような言葉を拾ってみます。

「神はすべてを(中略) 見極めることは許されていない」(三・一一)

「わたしは知った。すべて神の業は永遠に」(三・一四)

「神は天にいまし、あなたは地上にいる」(五・一)

「妊婦の胎内で霊や骨組みがどのようになるのかもわからないのに、すべてのことを成し遂げられる神の業が分かるわけがない。」(一一・五)

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」(一二・一)

「すべてに耳を傾けて得た結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ、人間のすべて」(一二・一三)
わたしたちは、いろいろな人の生きざまをみて、あの人の人生は意味のあるものだったとか、無意味

な人生だったとか、勝手に判断いたします。その際の基準は、人間社会に有益な知識や知恵を提供したかどうか、富や財産をどれだけ所有したか、あるいは味わった快樂の質の高さなどです。それは「わたし」が主語の世界で、「わたし」が何かを行うこと、活動したり、事業を展開したり、仕事をしたりすることによって体験し、味わうことのできる幸福感であり人生の意味です。コヘルトはそのような人生の意味を否定はしない。分を越えない程度にほどほどに楽しめという。しかし、人生の意味はそれに尽きるものではない。「あなたの創造主に心を留めよ」(二二・二)。自分の被造性を知れという。自分が主語の世界ではなく神が主語の世界に目を開かれよと説くのです。この神からの問いかけとして人生を受け取るときに、そこに新たな人生の意味が、人生の土台が現れてくるからです。

東北学院大学の日常には、毎日礼拝の時間が設けられています。まるで日常の業務を断ち切るかのようには礼拝の時間が設けられているのです。その意味は、コヘルトが説くところと同じです。自分が主語の世界がすべてではなく、神が主語の世界が存在し、わたしたちの日常を根底から支えている。このことを思い起こすために礼拝の時間が設けられているのです。

(二〇二〇年十月二十一日 土樋キャンパス礼拝)



必要なことはただ一つ

大学宗教授主任 出村 みや子

ルカによる福音書 十章三八〜四二節

38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけでもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」41 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

今日選びました聖書の箇所は、主イエスが親しく関わったマルタとマリアという名の二人の姉妹の話です。聖書はほとんどが男性の登場する物語ですが、この物語には性格が対照的な二人の姉妹の姿が生き生きと美しく描かれ、読み返すたびに新たな発見があります。コロナ禍でこれまで経験したことのない生活上の変化によって様々なストレスを抱えた現代人に、この箇所は重要なメッセージを与えてくれるように思います。

物語は、イエスがある村に入ったときに、マルタが妹のマリアと共に住む家に迎え入れたことから始まります。当時のユダヤ社会では、男性教師のラビが女性の弟子の家を訪ねることは珍しいことでした。出来る限りのもてなしをしようとあれこれ心を砕くお姉さんのマルタに対して、部屋に入ったイエスの足元に座って、姉の手伝いを何もせずにイエスが語られる言葉にじっと耳を傾ける妹のマリアのいる場面の対比が大変印象的に描かれています。こうした場面は大切な来客を迎えた家庭の日常の光景としてわたしたちの記憶にも残っているのではないのでしょうか。みなさんはかつて、幼稚園や小学校時代にあった家庭訪問の日や特別な来客があった日のことを思い出しませんか。

男女平等が進む現代社会にあつては、来客のもてなしは必ずしも女性の役割ではなくなりつつありますが、イエスの時代のユダヤ社会においては、大切な来客の接待は、かつての日本のように女性の役割とされてきました。「多くのことに思い悩み、心を乱している」ことを指摘されたマルタの姿は、ストレスに満ちた忙しい日々を生きる現代の私たちにも通じるころがあります。その意味でマルタは世の常識や規範を重視する生真面目な女性であつたのでしょうか。

ところで、この春からのコロナ禍では小中学校が休校になったり、学校の授業が遠隔授業に切り替わったりし、また普段は会社に通勤している人が在宅でリモートワークになったという例をしばしば耳にします。皆さんのご家庭や身の周りにも大きな変化があったのではないのでしょうか。そのような生活上の変化の中で、改めて日本社会の男性中心主義的傾向も明らかになっています。今まで以上に女性の負担が増し、家族の食事の世話や育児に時間を取られるのは圧倒的に女性の割合が多く、ストレスを抱える割合も高くなっています。特にマルタのように生真面目な頑張る女性は、仕事を続けるために家事や育児をもしっかりやるべきだと考えがちなので、自らを辛い状況に追い込んでしまうのです。

一方妹のマリアは、大切な客人の接待という、当時の女性に期待されていた役割を放棄してまで、ただイエスの足元に座ってそのみ言葉に聞き入る姿勢を崩さなかったのです。このひたすらなマリアの姿勢は私たちの心を打つものですが、しかし生真面目なマルタはそのような妹の常識はずれな態度を許すことができず、思わずイエスにまで不満をぶつけてしまいます。「主よ、私の姉妹は私だけにもてなしをさせていますが、何ともお思いませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と。こうした不満の言葉は現在のコロナ禍での外出自粛やリモートワークの拡大で、多くの家庭から聞こえてきそうですね。

「がんばる」は時に「我を張る」に通じ、がんばっている人は往々にしてそうでない他の人を非難しがちです。自分はこのなにながらんでいるのに、どうして周囲の人は協力してくれないの、という訳です。しかしその根底には、マルタ自身に、女性は来客のもてなしを何よりも優先すべきだ、という思い

があったのではないでしょう。今日の日本のジェンダーをめぐる問題も、ひとえに男性中心社会の中で効率を優先するあまり、性別役割分業の意識を残したまま女性の社会進出が進み、女性には自分の仕事の他に家事や育児、場合によっては介護の負担までもが重くのしかかっている現状があります。

このように取り乱したマルタに対して主イエスは優しく語りかけます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ、それを取り上げてはならない」と。このイエスの言葉は決して叱責の言葉ではなかったでしょう。おそらくは「良い方を選んだ」と言われたマリアにとってばかりか、忙しさに自分を見失いそうになっていたマルタ自身にとっても主イエスの優しい言葉は、自分に立ち返り、周囲から期待される役割から解放されてもよいのだという自由への招きとなったことでしょう。

しかしこれは女性に限ったことではありません。実はマルタのように「べきを優先させがちな」現代人の多くに対しても、イエスは「しかし必要なことはただ一つである」と語り掛けておられます。イエスは、様々な社会的責任を負う忙しい日々の中でイライラが募り、自分を見失いそうになるすべての人に対して、「しかし必要なことはただ一つである」というみ言葉に立ち返ることで始めて自分を取り戻し、他者をも思いやることができるということをも伝えているのではないのでしょうか。これからの皆さんのキャンパスライフにおいて、忙しさに自分を見失いそうになった時、心が疲れた時、どうぞパイプオルガンの音に癒され、今自分に「必要なただ一つだけのこと」は何かを思いめぐらせる時が、このキャンパス礼拝において備えられていることを覚えて頂きたいと思えます。



泉キャンパス礼拝堂



御言葉はあなたの近くにある

大学宗教授主任 木村 純 二

申命記 三〇章八〜一四節

8 あなたは立ち帰って主の御声に聞き従い、わたしが今日命じる戒めをすべて行うようになる。9 あなたの神、主は、あなたの手の業すべてに豊かな恵みを与え、あなたの身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを増し加えてくださる。主はあなたの先祖たちの繁栄を喜びとされたように、再びあなたの繁栄を喜びとされる。10 あなたが、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されている戒めと掟を守り、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主に立ち帰るからである。

11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。12 それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。13 海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

キリスト教について学ぶ際、学生たちにとって、自分と聖書の神さまとの交わり、神さまとの人格的な交流というものを、実感をもって理解するのは、なかなか難しいことのようにです。受験の合格祈願や正月の初詣などに行ったことのある学生も多いかと思いますが、現在の日本では、たいていの場合、神社にお参りしてもこちらの願い事を一方的に伝えるだけで済ませてしまうので、神さまのほうから自分に向けて話しかけて来るということをそもそも想定していないようです。

しかし、キリスト教では、人間と神さまとの関係はそうした一方通行のものではなく、お互いに働きかけ合う相互的なものだと考えています。そこに自分と神さまとの人格的な交流というものがあるわけです。今日は、そうした神さまとの人格的な交流・対話ということについて、少し考えてみたいと思います。

『旧約聖書』には、アブラハムとか、モーセといった人物が神さまとあれこれ会話を交わす場面がたくさん描かれています。こうした場面は、学生にとってはお話として面白いとしても、実際のこととしては、なかなか信じるのが難しいようです。しかし、われわれは彼らのように直接神さまの声が耳に聞こえなくても、神さまと言葉を交わすことができます。なぜなら、われわれには聖書があるからです。とはいえ、聖書が神の言葉だということも、すぐに信じられるものではないかもしれません。そこで今日は、クリスチャンの人たちがどのように聖書の言葉を受け止めているのかということをお話したいと思います。

例えば、クリスチャンの間では、お互いに聖書の言葉を分かち合うことがあります。自分が落ち込ん

でいる時に聖書のこの言葉で励まされたとか、この言葉がすごく好きで大切にしているとか、聖書の言葉にまつわる互いの経験シェアすることで、御言葉の力がより深く感じられ、神さまの働きを身近に感じることが出来ます。

私自身のことと言うと、私は上から順に女・男・男の三人の子どもがおり、妻と合わせて五大家族で暮らしていますが、一番上の娘が今年大学一年生になりました。本来であれば、三月の終わりに東京に出るはずだったのですが、コロナの影響で前期はすべてオンライン授業になってしまい、四月以降もそのまま仙台の自宅で暮らしていて、後期から一部対面授業が始まるということで、九月の終わりにようやく上京しました。家族で送別会をした時に、家族全員がそれぞれ自分の選んだ聖書の御言葉を娘に贈ったので、それを紹介させていただきます。

まず、一番下の小学五年生の弟が選んだのは、『新約聖書』「ローマの信徒への手紙」一二章二節の、この言葉です。

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

これは、大学生として上京し、新しい生活への期待に胸を膨らませるお姉ちゃんに対して、周りに流されないで、「心を新たにする」というのは「何が神さまの御心であり、神さまに喜ばれることであるか」に心を向けることだということを忘れないでね、というメッセージでした。

高校一年生の真ん中の弟が選んだのは、『旧約聖書』「詩編」二三編でした。その一〜四節をお読みします。

主は羊飼いで、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。

弟としては、お姉ちゃんがぜひこの大学で学びたいという明確な目標を持ち、それが神さまの御心にも適うはずだと信じて受験勉強に励み、無事に合格して喜んでいたのに、前期の間一度も大学に行くことができずに、落ち込む姿を見ていたので、神さまが疲れた魂を生き返らせてくれるよ、また、コロナの危険が高い東京に出て行くけれども、神さまが共にいてくれるから恐れなくてもいいよ、というメッセージでした。

妻が選んだのは、『新約聖書』「フィリピの信徒への手紙」二章一三〜一四節でした。

あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行かせておられるのは神であるからです。何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。

これは、娘が大学での学びや自分の将来に大きな希望を抱いて前に進んで行こうとしているけれども、それは、神さまが自分の心に働いて望みや希望を与えているのだから、それを信じて真っ直ぐに進みなさいというメッセージでした。

私を選んだのは、『新約聖書』「コロサイの信徒への手紙」三章二三～二四節です。

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。

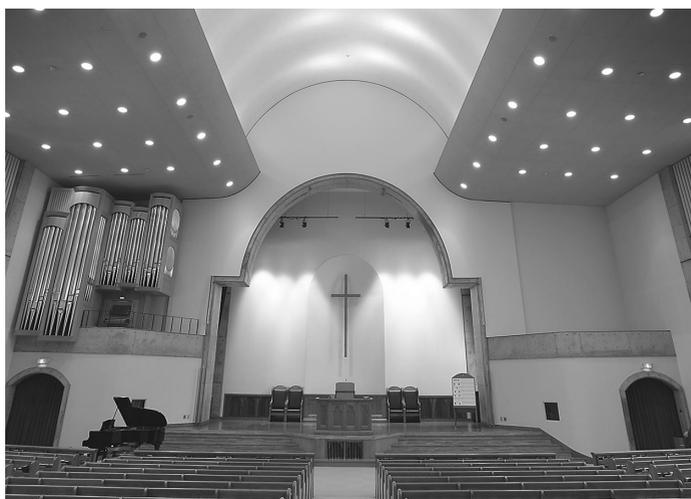
大学生活で新しい友達ができて喜んだり、逆に嫌な経験をして誰かに不満を抱いたりすることがあるかもしれないけれども、相手を基準にするのではなく、神さまを基準にして下さい、というメッセージです。娘自身は高校一年生の時に自分の意志で洗礼を受けたのですが、あなたはキリストに仕える者だから、大丈夫ですよ、という確認でもあり、励ましのつもりでもあります。

こうした御言葉のやり取りは、普通に見れば、娘にとって家族のみながそれぞれ聖書の言葉を自分にプレゼントしてくれたということになるのですが、別の見方をすれば、神さまが家族一人ひとりを通じて、その言葉を自分に向けて語り掛けているということでもあります。そして、このように聖書の言葉をお互いにやり取りすることで家族の関係を深めることができれば、それはまさに神さまが自分たち家族に働きかけ、祝福を贈ってくれたと感じられ、聖書の言葉が神さまの言葉だと信じられるようになるわけです。

ですから、聖書の言葉が神さまの言葉だといっても、必ずしも全部を一人で読んで、神さまの言葉として理解しなければならぬというわけではありません。学生のみなさんは、これまでキリスト教学の授業や大学礼拝に出席して、たくさん聖書の言葉を聞いて来ました。それはみな、その時々、神さ

まがあなたのところにその担当者を遣わして、あなたに向けて神さまが語り掛けていたわけですから。

今日の聖書箇所でも、神さまの言葉は、天上の世界や海のかなたなど自分から遠いところにあるわけではなく、「あなたのごく近くにあるのだ」と教えています。今日神さまは、あなたに向けて言葉を届けるために、私を用いました。授業や礼拝で聞いた聖書の言葉一つひとつを心の中で大切にしていれば、必ず何かのかたちで人生の励ましや祝福となり、やがて、それが自分に向けて贈られた神さまの言葉なのだと確かに信じることができるようになるはずです。あなたに贈られた神さまの御言葉の種を自分の中で大切に育て、花を咲かせ実を実らせてくれるよう、期待しています。



多賀城キャンパス 礼拝堂



「仕える」生き方

大学宗教学主任 吉田 新

マルコによる福音書 一〇章四二〜四五節

42そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。43しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。45人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

今週からアドベント（待降節）に入ります。アドベントという単語は「到来」を意味するラテン語に由来します。アドベントは、救い主イエス・キリストを迎える準備の時です。この時は、イエス・キリストが何のために、そしてどのような姿で私たちのところに来たのかを考え、黙想するときでもあります。

聖書には困難な状況に置かれている人々のかたわらに立ち、その人たちを支え、助け、慰めるイエスの姿が記されています。ですから、苦しみ、悩む人々と共に生きたイエス・キリストに従い、その行いに倣うことは、聖書の大切な教えです。

私は長くドイツに留学していました。留学していた際、私の周囲には国際問題、貧困や人権侵害に強い関心を抱く仲間たちが多くおりました。彼、彼女らは大学に入る前、または大学在学中に困難な状況に置かれている人々のために、数ヶ月間から一年間、ボランティア活動に従事し、または研修に参加していました。テレビや新聞などのメディアからの情報だけではなく、実際の現場を自分の目で見、何をすべきかを真剣に考えていました。自身の体験を周囲の友人たちと共有し、仲間と一緒に身近な場から実践に努めていました。

私が住んでいた学生寮では、学期ごとに募金を集めて世界の様々な施設に送金していました。寮集いで、そこに住む仲間たちは自分がかつてボランティアや研修を行った施設を紹介し、どの施設にどの程度の募金をすればよいかを話し合いました。エチオピアの子供に英語を教えた女性は、この国の女性支援施設の現状を報告しました。南米ドミニカ共和国で一年間学んだ他の女性は、HIVの感染者たち

の共同体に送金する案を提案しました。パレスチナの障がい者施設で働いた経験のある男性は、資金難を抱える施設の実情を訴えました。

自らの体験を話す彼、彼女らの姿を見て、何でも吸収できる心と体を持つ若い時に、現地で働くことは、世界の悲惨を自分のこととして考え、活動する力を養うことができると強く思われました。そして、人々に仕える生き方を若い時から学び続ける大切さも教えられました。

今日、お読みした聖書の箇所の前半にある「支配者」または「偉い人たち」というのは、おそらくローマ帝国の為政者らを指すものだと考えられます。ここでは、力で人々を押しさえつける帝国を強く批判しています。しかし、二千年近く前に発せられたイエスのこの言葉は、現代の世界にもあてはまるのではないのでしょうか。暴政が支配する世界に対し、イエス・キリストは、まったく別の人間のあり方、生き方を教えています。「大いなるもの」「偉大なもの」とは、すべての人に「仕える人」だとイエスは私たちに伝えます。力を持つ人、権力を持つ人は己の力に自惚れず、謙遜になることを勧めているのです。

この聖書の箇所では何度も「仕える」という言葉が登場します。この言葉の意味を少し深く探ってみたいと思います。ギリシャ語では「ディアコネオー」という言葉です。この言葉には「仕える」「奉仕する」という意味と共に、「食卓を準備する」「食卓を整える」「給仕する」という意味もあります。人々の命を養い、命を支える食事を用意することも、「仕える」「奉仕する」ということの大切な意味だということも忘れてはならないと思います。

イエス・キリストから教えられる奉仕の生き方とは、他の人たちの食卓を整える、つまり、人々が生き続けるためにその用意をするということです。「奉仕する」とは抽象的なことではありません。具体的なことです。イエス・キリストも実際、飢えた人々と共に食事を守られました。聖書にはその出来事を記した箇所が多くあります。今日、お読みしました聖書にある、「皆に仕える」とは、「皆の命を支えるお手伝いすること」に他ならないのです。

では、人々に仕える生き方を貫かれたイエス・キリストは、いまどこにおられるのでしょうか。私たちがここに手にします讃美歌集に、その答えの一つが示されています讃美歌二二の五六三番、「私はここにいます (Here am I)」という歌です。

この讃美歌を作詞したのはブライアン・レンというイギリス人の牧師です。彼が作詞した曲が何曲も讃美歌二二に収録されています。レン牧師の詩はとてもユニークで、それまでの讃美歌の歌詞とは違います。この曲の歌詞も私たちが直面する現実のなかで、私たちの信仰を言葉に表し、またキリスト者として何をすべきかを分かりやすい言葉で伝えていきます。この曲はもともと、一九八二年十月に、スコットランドにある社会福祉施設の要請により、その年のクリスマス礼拝で歌われるために書かれたものだと言われています。日本の讃美歌の詩はもともとの歌詞を少し省略していますので、原詩の最初の節をここに紹介します。

ここに私はいます。

冬の街の

どこかの橋の下に

ホームレスがねむっているところに。

ここに私はいます。

壊れかけた家で

寒さに震え、泣く小さな子供たちのところに。

あなたはどこにいますか。

あなたはどこにいるのか。そう私たちはイエス・キリストに問われています。アドベントの時、人々の仕えるためにこの世界にきたイエス・キリストのことを覚えます。そして、幼子イエスから「あなたはどこにいるのか」と問われていることを忘れないでいたいと思います。



地の平和

大学宗教学主任 田島 卓

レビ記 二五章八〜十二節

8 あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。9 その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、10 この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。11 五十年目はあなたたちのヨベルの年である。種蒔くことも、休閒中の畑に生じた穀物を収穫することも、手入れせずにおいたぶどう畑の実を集めることもしてはならない。12 この年は聖なるヨベルの年だからである。あなたたちは野に生じたものを食物とする。

いま、ここに木でできた楽器があります。楽器に使う木というのは、目が詰まって硬いほうが良いのですが、そのような木というのは寒冷地で、長い時間を掛けて育つものです。そのような木を切り出して、楽器に使うわけですが、百年かけて育った木を百年以上かけて使う、つまり次の世代へと継承していくという時間の流れのなかにあることを奏者は意識しなければなりません。私はこの楽器にとって、二人目か三人目の所有者であるはずですが、私がいなくなったあとも、この楽器は残ります。私がいなくなったあともいつか誰かにこの楽器を手渡すことまでが、奏者に課せられている義務なのです。

近年、気候変動は喫緊の問題になりつつあります。SDGsや人新生という言葉が聞かれるようになってきました。偏西風の吹き方が変わり、航空機の運行には支障が出ています。海水温の上昇は海水魚の回遊ルートを変化させ、記録的な不漁の原因になっています。一、二度の温度上昇が穀物の生育を妨げ、食品の価格の高騰を招きます。気候の変化は線状降水帯の発生などにより、記録的な大雨災害が頻発する原因になっています。温暖化の中で、災害に対するコストは上昇しているわけです。

環境の破壊と人間の経済活動には、不思議なことに、深い関わりがあります。いやしかし当たり前といえは当たり前かもしれません。人間の経済活動の原資になるものは自然だからです。高度に情報化したこの時代にあっても、たとえばノートパソコンのバッテリーの原料となるリチウムを発掘し、電力の元となる石油を汲み上げねばなりません。高度に情報化された社会はしばしば精神的な側面にだけ焦点が当たりますが、情報でさえ、背後にはなんらかの物質性を帯びていることを見落とすことはできません。そして、この地球上の物質は有限なのです。

創世記の二章五節や一五節をみますと、人間は土を耕すために作られているように読めます。もしかすると、「耕す」という農耕経済を示す言葉というよりも、土に「仕える」や「奉仕する」という言葉の方が適切かもしれません。創世記二章で「耕す」と訳されている言葉アバドは、「奴隸」を意味する言葉エベドと同じ語根をもっており、人と土地の関係が、農耕などを介した土地の支配ではなく、土地に対する配慮をこそ、創世記二章は物語っています。創造の秩序のなかで、創世記二章の著者は人と土地の関係をこのように見つめていました。だからこそ、その後には人の罪によって創造の秩序が乱されていくとき、しばしば預言者たちの言葉に見られる終末的なヴィジョンのなかでは、土地は荒れほうだいになり、荒廃した姿で描かれます。預言の言葉の中では、荒廃した土地はいわば人間の罪を象徴的に表現する風景になっているのです。

古代オリエントでは、農耕民と牧羊民の生産形態の違いとそれに起因する社会的立場の違いは明確に意識されていました。安定した農耕に反して、古代イスラエルが保持しようとしたアイデンティは旅人のそれでした。すなわち、神に導かれる遊牧民としてのアイデンティでした。そして、土地に住まう時代がやってきたときにもなお、土地の授与はあくまでも神の嗣業であるという宣言がなされたのでした。これはなぜでしょうか。

一つの理由は、おそらく人間が土地の所有者となると、地に対して奉仕するという仕方での農耕ではなく、自らの懐を温めるための農耕活動、いわば生産活動、経済活動としての農耕へと転化してしまうからです。いわば主従関係が逆転します。このとき、土に仕える存在としての人間のあり方は根底的に

変化してしまいます。

土地の所有は、持つものと持たざるものを分けてしまいます。土地の私有化とそれを元にした経済活動は、貧富の差を広げ、人が人を支配するという構造を支えてしまうところがあるのです。

拡大した貧富の差によって、社会的な強者と弱者に社会が分断され、より強い人がより弱い人を支配するという構造的な問題に対して、レビ記の示す方向は極めてラディカルです。五十年に一度、ヨベルの年には、すべての土地の所有権がリセットされます。すべての土地の売買がリセットされ、神の与えたもうた最初の贈与に立ち戻ることが指示されているのです。土地の所有が富の蓄積を生み、蓄積された富が人の分断を生むとすれば、その根源にある土地の所有を一度元に戻してしまうという、途方もない企てがここでは語られています。

もちろん、このようなことが実際に行われたとしたら、社会は五十年ごとに大混乱に陥ってしまうでしょう。しかし、なぜこれほど途方もない語り方がされるのでしょうか。それは、人が自らのうちに住まわせてしまっている欲望や罪を自らの力では根絶できないからではないでしょうか。現行の経済システムがいかに矛盾をはらみ、機能不全を示しているも、私たちは自力では、ほとんどこれを止めることができません。まことに、人を救い、解放する力はただ神からやってくるということ認めなければなりません。

神の告げるヨベルの到来こそが、人々の解放をもたらすものです。借金のために土地や自らを売らざるを得ず、奴隷となってしまう人々は、ヨベルの年に値なしに解放され、自由の身となります。人が

自らの経済活動の手段としてしまっていた大地も、人の手から解放され、自由のうちにやすらぎます。人の解放と大地の解放が行われます。人間の利得の追求によって歪められてしまった問題は、神の告げのヨベルの年によって、解放されるのです。

そして、ヨベルのヴィジョンはイエス・キリストという姿をとって完成されたのでした。このまだ暗さの中にある世にあって、私たちは贖われた旅人として、世界へと歩み出していきたくないと願うのです。



行きなさい、神の示す地へ

大学宗教授任 阿久戸 義 愛

創世記 一二章一〜三節

1 主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

2 わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

今日歌った讚美歌一五八番「あめには御使い」ですが、きつと誰もが聞いたことのある旋律だったと思います。[HYMN TO JOY\Arr. From Ludwig van Beethoven's Symphony Nr.9]。ベートーヴェンの「第九」です。皆さんは、ベートーヴェンがどんな作曲家だったか、知っているでしょうか。彼は「楽聖」、音楽の聖人と呼ばれるほど、人類史に残る素晴らしい音楽をたくさん書いた人でした。しかし、よく知られているように、彼はある時、急に耳が聞こえなくなってしまいました。音楽家にとって音が聞こえなくなるとは、どれほどのことでしょうか。今まですつと苦勞して積み重ねてきたスキルやキャリアのすべてが、不条理に奪われるのです。一体どんな言葉で慰めることができるでしょうか。ベートーヴェンは、自分が音楽家として終わってしまったと思い、自殺を考えました。実際に彼は遺書まで書いています。しかし、自殺を考えながら、彼が大好きだった森の中を歩いているとき、ふと、「生きよう」という思いが不思議と湧き上がってきたというのです。彼は再び作曲を始めます。彼は、人の声や音は聞こえなくなってしまうましたが、ピアノなどの振動から音を感じることができました。諸説ありますが、彼は指揮棒を口に咥え、それをピアノに当てて、必死にその振動で音を感じながら、作曲を続けた、という言い伝えがあります。物凄い姿です。敢えて申しますが、「美しさ」とはほど遠い、垂れ落ちる涎や汗にまみれた、まさに泥だらけの執念を感じる凄絶な姿です。しかし、彼は、こう考えていたのです。ベートーヴェン自身の言葉で、このように言っています。

「私達にとって最善のことは、苦惱を通じて歓喜を勝ち得ることです。」

彼は、苦惱と苦難を越えて、その先に歓喜が待っていることを信じていたのです。それは、「どうに

かなるさ」という樂天的無責任さとは違います。今私は不安と絶望の闇の中にいる、しかしこの闇を振り払い、進み、その先に待っている勝利と歓喜へと必ず至る。そのような確信を持っていたのです。闇の先にある祝福の光を、彼は強く強く、信じていたのです。そのような確信から、彼は、人類史上最高の傑作と賞される、あの交響曲第九番を書き上げます。哲学者ロマン・ロランは、このような人生を生きたベートーヴェンの生涯を讃え、「この人こそ人類史上最高の人物である」と評しています。

さて、このベートーヴェンの話を踏まえつつ、今日の聖書の箇所を読んでみたいと思います。神はアブラム（後にアブラハムと名前を変えます）に、「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしの示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める」と言われます。このときアブラハムは七十五歳、住み慣れた土地を離れて新しい場所に移り住むには高齢過ぎると言ってもよいでしょう。しかも、聖書をよく読んでみますと、神は「わたしの示す地」に行きなさい、とだけ言っています。神はアブラハムに、その地がどんなところなのか説明していません。「大いなる国民にする」と言っていますが、「そこをあなたに与える」とか「その土地で大金持ちになれる」というような「約束手形」も与えていません。ただただ、「自分が示す地へ行きなさい」とだけ仰せになっているのです。安住の地を離れて、見知らぬ土地へ、何が起こるのか何が待っているのかまったくわからない場所に、「行きなさい」と命じられたのです。アブラハムは不安ではなかったのでしょうか。先のわからない未来、これからどうなるのかわからない自分の人生に対して、まったく不安がなかったとは思えません。それでも！アブラハムは「信仰の父」と呼ばれるような人でした。「信じるこ

と」において比類無き人物であったアブラハムは、それでも神を絶対的に信頼していたのです。彼は、何よりもまず神が自分を祝福して下さったのだから、神はいつも自分と共にいてくださり、山あり谷ありの人生かも知れないけれど、それでも最高の人生を神が私に用意して下さっている、と信じていました。神が私達にくださる「祝福」とは、神がいつも私達と共にいてくださり、本当に大切なもの・善いものを与えてくださる、という希望と信仰です。しかしそれは、例えば「厄除け」のように、不安や苦しみがもうやってこなくなる、ということではありません。そうではなく、どんな苦しみがやってきたとしても、私達は神に支えられて必ずそれを乗り越えていくことができる、そしてその先に必ず素晴らしい日々が私達を待っている、という希望と信仰が、神から私達に祝福として与えられるということです。アブラハムはすべての人の「祝福の源」となると言われた神の言葉を心に留め、何が待っているかわからない人生の旅に、確信を持って進んでいったのです。彼が生きた人生、神に信頼する人生は、まさに苦しみや不安の中に生きる人々に対して、「大丈夫だ！行きなさい！」という、励ましと祝福のメッセージであります。そのような人生を生きたアブラハムもまた、「人類史上最高の人物」のひとりであったと言えましょう。

苦悩と苦難の先にある希望を信じたベートーヴェン、そして信仰の父アブラハムに、私達が今日学べることが何でしょう。コロナウイルス感染流行という、先が見えず、明日に確信を持つことができないう、不安と苦難の日々です。しかし、「私達の人生の旅は山あり谷ありだけれど、必ず神様が共にいてくださり、祝福して下さる」という確信に満ちて、まっすぐ前に歩もうとする彼らの姿勢こそ、人生

を照らし、明日を切り開いていく人間の姿だと言えるでしょう。困難な日々はまだ続くかもしれない。人生は生やさしくはありません。しかし、希望をもって、神様の祝福を受けつつ、私達の人生を歩んで参りましょう。「行きなさい、神の示す地へ」。



起き上がりがりなさい

大学宗教学主任 藤野雄大

ヨハネによる福音書 五章一〜九節

1その後、ユダヤ人の祭りがあつたので、イエスはエルサレムに上られた。2エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があつた。3この回廊には、病氣の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわつていた。5さて、そこに三十八年も病氣で苦しんでゐる人がいた。6イエスは、その人が横たわつてゐるのを見、また、もう長い間病氣であるのを知つて、「良くなりたか」と言われた。7病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」8イエスは言われた。「起き上がりがりなさい。床を担いで歩きなさい。」9すると、その人はすぐに良くなつて、床を担いで歩きだした。その日は安息日であつた。

二〇二〇年は、新型コロナウイルスが猛威を振るった年でした。日本だけではなく、世界中がコロナウイルスによって深刻な影響を受けました。そして今も、コロナウイルスの拡大は収まるどころか、ますます強くなる一方です。多くの人がコロナウイルスに感染し、命を落としました。また世界や日本の経済も大きな打撃を受けています。世界中が病に苦しみ、将来への恐れと不安を抱えながら生きているように思えます。

本日の聖書であるヨハネによる福音書五章の箇所にも、病に苦しんでいる人が描かれています。この箇所では、ユダヤ人の祭りがあった時、エルサレムのベトザタと呼ばれる池で起きた出来事が記されています。ベトザタの池とは、神殿で捧げられる羊やその他の動物を清めた場所であり、聖なる場所とされています。また病をいやす不思議な力があると考えられていました。古代の言い伝えでは、天使が下ってきて、水面を動かした時、最初に池に入ったものは、どんな重い病であっても癒されると信じられていたようです。

そのため、池の周りにあった回廊には、いつもたくさんの病人がいました。一説によると、この場所は、奇跡の泉であると同時に、神殿に詣でる人々が、いけにえの動物を購入するために必ず立ち寄る場所であったとされています。そのため、病気によって働けなくなった人々が、物乞いをしている場所でもあったと考えられています。そうやって物乞いをして日々の暮らしをつなぎながら、水が動くわずかなタイミングを逃さないように、多くの病に苦しむ者がかたずを飲んで見張っていたわけです。

これは、なんとも奇妙な光景ではないでしょうか。わらにもすがる気持ちで、たくさんの病人が、水

が動くのを待ち構えています。そして水が動くと一緒に池に駆け込みます。しかし癒されるのはたった一人だけなのです。そのため、それ以外の人は、癒しを目前にしなから、それを得ることなく、また元の場所に戻っていくのです。そこでは、希望を目の前にしながら、絶望を味わっている人々がいました。救いを前にしながら、地獄を見ている人がいたのでした。

しかも病が重ければ重いほど、一番乗りは難しいということになります。聖書には、病に苦しむ人、特に目が見えない人、足が不自由な人、体のマヒした人が池の周りに大勢いたと書かれています。これは、そういった病を抱えていた人は、池の水が動いても、最初に池に入ることはできず、必然的に長い間、取り残されることになったということの意味しています。

主イエスが声をかけられた人も、三十八年間もの長い間、病に苦しんでいたとされています。それが、どのような病であったかは聖書には記されていません。しかし、その期間の長さから、その病が、おそらく不治の病であったと推測できます。そして彼は、そのような重い病に悩まされながら、池の水が動く時に癒されることを、唯一の救いとしていたのです。しかし現実には厳しいものでした。病人は語ります。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」(五章七節)

この人は、癒しを求めながら、それを長い間得ることができません。それは絶望的な状況と言えます。この人は、癒しを願いつづけてきましたが、自分自身の力では、それを得ることはできません。また彼を手助けしてくれる人もいませんでした。そのような人に、救いを示すことができたのは、誰でしょ

うか。それは、ただイエス・キリストだけでした。キリストの言葉だけが、この人を立ち上がらせ、救いを与えることができたのです。

イエス・キリストは病に苦しむ人につきのようには語りかけられました。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」（八節）そうすると驚くことに、このキリストの言葉の通り、病が癒され、起き上がることもすら困難であった人が歩き出したと、聖書には記されています。

この物語は、非常に不思議な癒しの奇跡が語られていると言えるでしょう。そのため、現代人にとっては、信じがたいと感じられるかもしれません。しかし、この物語が本当に伝えようとしていることは、奇跡そのものの不思議さではありません。この癒しの出来事の中で、中心的なこととして語られているのは、キリストの言葉の持つ力だと考えます。

「起き上がりなさい。」長年病に苦しんでいた人は、キリストの言葉を聞きました。キリストの言葉によつて、この人は、強められ、ふたたび立ち上がることができました。それはキリストの言葉には、希望を失った人、悩める人、不安の中で打ちひしがれている人を再び起き上がらせる力があるということを示しています。

言葉には力があるということは、日常の中でも経験することだと思えます。例えば、SNSなどで傷を受けたことが理由で、自ら死を選ぶ人がいるという悲しい現実があります。心無い言葉は人を傷つけ、時に人の命さえも奪ってしまうのです。しかし逆に、暖かい応援の言葉が、人を勇気づけ、生きる支えになることがあるのも事実です。

「聖書は神の言葉である」と、しばしば言われることがあります。それは聖書が神から私たち人間に向けて語られた命の言葉であり、私たちを生かす言葉であるということを意味しています。聖書に記された神の言葉を聞く時、倒れていた人は立ち上がり、失望や不安を抱えている人には、希望や安心が示されます。

「起き上がりなさい。」このイエス・キリストの力に満ちた言葉は、ベトザタの池で癒しを願っていた人だけでなく、今、世界に向けて語られているものだと考えます。新型コロナウイルスによって、打ちひしがれ、力を失い、恐れと不安の中にいる私たちに語られている神の言葉です。今は倒れ伏しているも、聖書の言葉を聞くことで強められて、再び起き上がりたいと思います。



あなたがたはすべて光の子

総合人文学科教授 鐸 木 道 剛

マタイによる福音書 五章一四〜一六節

14あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15また、ともし火をともしして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 五章五〜一一節

5あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。6従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。7眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。8しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。9神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。10主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。11ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

二つの聖句を選びました。一つ目は、土樋キャンパスのホーイ記念館の入り口にも掲げられている「地の塩、世の光」です。この「世の光」という言葉は、一般にもよく知られていますが、今回のコロナ危機の状況下で、この言葉をめぐって気づいたことがありました。

コロナ伝染病蔓延のため、授業は五月から、しかも対面ではなく、遠隔で行うことになりました。その際、「ズーム (Zoom)」というミーティングのソフトを使います。それを使うと、パソコンのマイクを通しての声だけでなく、パソコンに内蔵のビデオカメラも使って、顔も出している複数の人たちとのミーティングがパソコン上で可能になります。一般教養のキリスト教学は一二〇人から一三〇人の学生さんが履修していますので、Zoomの画面では全員の顔を見ることはなかなかの手間なのですが、しかし見れます。これはいい、と思いました。従来の対面の授業では、ほとんどの真面目な学生に混ざって、出席はしているけれどもサボってる学生がいました。後ろの方に座っている学生です。それがZoomによるバーチャルな対面になれば学生は逃げも隠れもできなくなる。学習効果は絶対上がるはずと喜びました。しかし実際に始めてみると、学生さんたちはほとんど顔を出してくれません。つまりパソコンのビデオを使わない設定にしてしまうのです。顔を見ながらミーティングができるというのがズームの利点なのに。顔を出さない理由はいくつかあるでしょう。朝、起きたばかりで顔も洗っていないから、髪の毛がボサボサだから、お化粧してないから、しかしまた、誰も顔を出していない中で、自分だけが顔を出すと目立ってしまう、あるいは教師にいい顔をしていると友人に思われるから。要するにみんなと同じでありたい、いわゆる空気を読んでいるのでしょうか。

しかしそもそも姿を見せないというのは、前近代です。前近代の天皇です。天皇は御簾の奥にいて、見えません。なぜ見えないかというと神様だからです。どの宗教でも素朴なアニメズム段階でなければ、神様は見えないとされています。本居宣長も、日本の神について「迦微かみと申す名義なごころは未だ思ひ得ず」(『古事記伝』三の巻)と書いていて、神は表象不可能、すなわち見えないとしています。それに対して、近代は神の可視化です。明治天皇の肖像画が御真影として制作されます。これはキリスト教でのイエスの肖像画であるアイコンに倣っているはずです。しかし御真影は、それが制作されて教育の現場に配られると、それを収める奉安殿が作られて、やはりまた見せない、お辞儀を強いるなどして可視化が徹底しません。明治維新では完全な平等が実現せず自由民権運動が必要だったのと同じです。最終的に天皇の可視化が実現するのは太平洋戦争が終わってからで、昭和天皇は人間宣言をされて、全国に行幸され、お姿を現されました。ですから、Zoomで姿を出さない学生さんには、「あなたは御簾のかなたの天皇ですか」と言いました。他者から見られることなく、他者を見る、これはミシェル・フーコーも書いているように、神様の視点なのです。教会で後ろの方に座ることも同じです。昔、子供の頃、牧師さんに言われました。「礼拝では前の方に座りましょう。後ろの方に座るのは傲慢なのです。」後ろからは全体が見通せません。支配の視線です。だから世界を支配する植民地主義者たちは、高台に住んで世界を睥睨することを好みました。その見えない旧約の神がイエスとして受肉に見えるものとなった。これが福音です。そして我々は被造物のままで神につながる事ができた。これを聖化あるいは神化と言います。「主はわたしたちのために死なれましたが、それは……主と共に生きるようになるためです」

『テサロニケの信徒への手紙一』五・一〇。

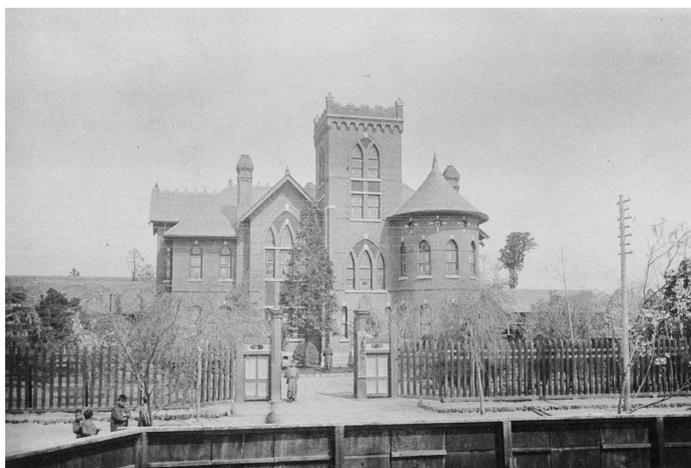
それで選んだ聖句です。「あなたがたは世の光である」に続けて、「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい」とあるのです。それ、できますか？みんな、なんかしら後ろめたいことなどあるのではないですか？しかし、人前に出なさい、そして「あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父を崇めるように」しなさいとあるのです。Zoomミーティングでも堂々と顔を出しなさいということです。自分に誇りを持ちなさい。自信を持ちなさい、です。なぜなら「あなたがたはすべて光の子、昼の子だから」(『テサロニケの信徒への手紙一』五・五)です。日本では遠慮深いこと、慎ましやかなことが美德とされて、それはそれでわかりますが、えてして、むしろそれは傲慢ともなるのです。

誰でも知っているモーセに与えられた十戒にも、そのことは現れていると思います。十戒が、禁止命令ではないと、同僚の旧約学の田島さんから聞きました。禁止命令ではなく、「くしないだろう」との意味だそうです。「あなたは殺してはならない」ではなく、「あなたは殺さないだろう」ということです。ぼくはヘブライ語は知らないのですが(今からでも勉強しようと、白水社の入門書エクスプレスを買い込んでいますが)、イエス時代に通用していたギリシア語訳の旧約聖書であるセプチュアギンタ(七十人訳)を見ました。そこでも否定命令の「メー (μή)」ではなく、単なる否定の「ウー (οὐ)」と接続法になっています。またイギリスでジェイムズ一世が一六一一年に認可した欽定訳も「ユー・シャル・ノット・・ (you shall not. . .)」と同じです。「ユー・シャル・ノット・・」は命令の意味だと、中学校の英語の時間では教わるでしょうが、やはり命令ではないです。あくまで未来の予測です。

同じく旧約聖書の『雅歌』の恋愛詩も同じように解釈できるのではないかと思ひ至りました。『コヘレトの言葉』の虚無的な世界観のすぐ後に、この恋愛詩が続いているので、これはコヘレトの快樂主義ではないかとも思ひましたが、「あなたがたはすべて光の子」であるという肯定的な世界観の現れではないかと今は思っています。「おとめ」の恋する男が、彼女に向かって「恋人よ、美しい人よ、さあ、立って出ておいで (come away)」と語りかけます。「立って出ておいで (come away)」つまり「一緒にどこかに行こう」という言い方は、イギリスのジェイムズ・バリー作の児童文学『ピーターパン』で、ピーターパンがウエンディに、一緒に人魚と海賊のところに飛んで行こうと語りかける言葉なのです。その第四章の見出しが「カム・アウェイ、カム・アウェイ (Come Away, Come Away)」となっています。バリーは当然、『雅歌』のこの部分を意識していたはずで

あなたは光の子なんだというメッセージが、実際には子供たちにとってプレッシャーになっていることもあるとは聞きますが、ドストエフスキーは『悪霊』の中で登場人物にこう言わせています。「人間がよくないのは、自分たちがいい人間であることを知らないからです。．．．それを知れば、女の子に暴行を加えたりはしない。人間は自分がいい人間であることを知る必要がある」(江川卓訳、第二編第一章)。この肯定的な世界観の根柢が受肉であることを想起しましょう。ドストエフスキーはコンスタンチノーブル以来の正教徒(オーソドクス)ですが、現代のプロテスタンティズムの神学者カール・バルトも説教で言っています。「神は、ご自身の愛する御子の人格において、最後まで完全に、最大の罪人のあの死にいたるまで、私たちの隣人・私たちの兄弟・徹頭徹尾私たちと同じ者、に成ってくださいま

した。すなわち、全く私たちに属する者に成ってくださいました。それは、私たちが、すべて人間が、この方に属する者―すでに神の子ら―であることがゆるされるために、でした」(カール・バルト『聖書と説教』バルト・セレクション一、新教出版社、二〇一〇年、四六二頁)。これを「アポカタスタシス(万物回帰説、そして万人救済主義、Universal Reconciliation)」と言うことは最近知りました。このことは、わが宮沢賢治が「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と『農民芸術概論』の中で書いているところの成就と言えるでしょう。二番目に引用した『テサロニケの信徒への手紙一』(五・五)では「あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。」その通りです。クリスマスへの喜びの根拠はここにもあるのです。



1891年当時の東北学院



もう、恐れなくていい

日本基督教団仙台東一番丁教会牧師 瀬谷 寛

ルカによる福音書 二章八〜一二節

8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

思ひ浮かべてみてください。羊飼いが、羊の群れの番をしていた時の出来事です。羊飼いは、昼の散歩の終わった羊たちを、いつものように、一匹一匹名前を呼んで確認をしながら、檻へ入れていました。いつものように、羊たちに餌をあげ、いつものように汚物の処理をし、いつものように、寝かすけていました。羊飼いたちは不安でした。彼らがいつものように、羊の世話するのは、自分の責任を果たすためでした。この羊飼いの仕事すら、奪われてしまうかもしれない。いつものように、略奪者、盗賊が、羊を盗んで行かないように、あるいは、いつものように、夜になると羊を狙う獣、野獣が入り込んで襲わないように、夜通し、交代で仮眠などを取りながら、見張りをしていました。この羊飼いのついでには、野宿をしなければならぬ仕事、というところから、社会の中で、底辺にある人々たち、簡単に言えば、路上生活者に近いような人々たちがこの仕事についていた。そのような人々でありながら、しかしまた、不安に襲われ、恐怖に怯えていました。

すると突然、光が照らした、というのです！ 決定的な時です。これは、聖書には、はっきりとは書かれていませんが、確実に、上から下まで伸びてくる光です。

クリスマスは、日常の中に生きているわたしたちに、突然飛び込む、光の前に立つ出来事です。神の栄光が現れ、地上のすべての人間が大きな恐れの前に立ちすくむ出来事です。

そのときに、わたしたちがもっている小さな不安は、みな吹っ飛ばはらずです。わたしたちの生活は、日々、平穩無事で何事もなく過ごしているようでありながら、わたしたちの日常は、あの、羊飼いがそうであったように、様々な、不安と恐怖に怯えているところがあります。将来への恐れ、家庭の中にあ

る、いろいろな恐れ。家庭の中で、自分の地位を守りたいと思う恐れ、学校の中で、人間関係を失ってしまうのではないかとという恐れ、この世の中で、自分はどうなってしまうのか、という恐れがあります。自分は今は元気で健康だけれども、いつどのような病気にかかってしまうか、という恐れがあります。

特に、この二〇二〇年という年を振り返ったときに、わたしたちの世界を容赦なく襲った新型コロナウイルス、このウイルスは、わたしたちの生活に様々な不安を呼び起こさせるのに、十分な力を持つものです。いつ自分が、周りの親しいものがこのウイルスに襲われてしまうかもしれない。様々な不安に、わたしたちは陥ります。

そしてそのような不安に落ちいったときに、わたしたちがしばしばしてしまうのは、お互いにつぶやき合い、お互いに非難し合い、お互いに憎み合ってしまう。自分の家族ですら、友人ですら、憎んでしまう。不安だからです。その不安に脅かされて、自分の身を守りたいばかりに、人を責めることに、心が向かっていってしまいます。

クリスマスに、天使たちが知らせる恐れがあります。それは、神ご自身がやって来られる、神ご自身がここにおられる、というところから生まれる恐れです。これこそ、大きな恐れです。その大きな恐れの前に、小さな不安、小さな恐れ、そのために人を憎まずにいられない、わたしたちの本当の、恥ずかしい姿が暴露されてしまいます。けれどもクリスマス、神がここにおられる、という大きな恐れの前に、わたしたちは、恥じるなら恥じてよい、悲しむなら悲しんでもよい、立ちすくむなら立ちすくむ

でも良いと思います。それに気づき、それを認めることから、わたしたちの前進が始まります。

天使は告げました。「恐れるな、わたしは民全体に与えられる、大きな喜びを告げる」と。「恐れるな」と語る天使は、「大きな喜びを告げる」、と同時に語りました。この大きな喜びこそ、イエス・キリスト、神の御子であるお方が、この地上の世界にお生まれになられた、世界の、そしてわたしの救い主として、お生まれになられた、その喜びです。

大きな光、大きな恐れにとらわれるわたしたち、そこで立ち止まって耳を澄ますと、聞こえてくる声は、この「恐れるな」という声です。恐れを取り除いてくださる。大きな喜びを与えてくださる。もう、わたしは、わたしたちは恐れなくていい。あなたに、大きな喜びをもたらす。これは、神の真実の言葉です。神は、本当は、わたしたちを恐れさせるのではなく、むしろ、恐れを認めさせつつ、その恐れを取り除いて、その恐れにまさる喜びを与えようとしてくださいます。

主イエス・キリストは、そのために生まれてくださいました。わたしたちを不安から、恐れから解放し、神の前で真実に喜ぶことができるように、わたしたちをそのような者にしてくださいます。

やがて主イエス・キリストは十字架にかかれ、死んでくださった。それは、わたしたちすべての人間の不安を、恐れをすべて、ご自分の背中に背負ってくださった死です。

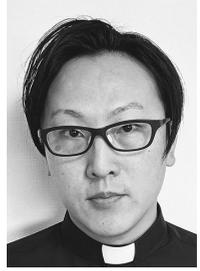
ですからこのクリスマスにこそ、わたしたちの恐れを、不安を、この主イエス・キリストに、父なる神にお委ねしたいと思えます。主イエスは必ずそれを、引き受けてくださいます。わたしたちは、もう、恐れることはありません。

祈り

主イエス・キリストの父なる神さま、

わたしたちは今、恐れと不安のただ中にあります。クリスマス礼拝を配信で祝わねばならない、コロナウイルスに脅かされています。けれども、まことの救い主イエス・キリストは、たしかにこの地上にお生まれくださり、わたしたちの不安をすべて、十字架の上で、取り除いてくださいました。不安にあえぐわたしたちを憐れみ、その上でなお、その不安を取り除けてくださるあなたのみ力を、信じ、感謝し、喜ぶことができますように。東北学院大学が、この、主イエスによって常に守られ、支えられますように。

主イエス・キリストのみ名によって、祈ります。アーメン



不思議なクリスマス

日本基督教団東和歌山教会牧師

阿部 倫太郎

ルカによる福音書 二章八〜二〇節

8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14 「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18 聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。19 しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

クリスマスという言葉は「キリストを礼拝する」という意味です。不思議な感覚ですが、今この瞬間、私たちはキリストを礼拝しているのですから「クリスマスしている」状態と言えます。不思議な感覚というのは、この礼拝が動画によるものだからです。皆さんがどのような環境でこの動画をご覧になっているか分かりませんが、私の目の前には録画ランプが点いたスマートホンが置かれているだけです。これが礼拝か…と思わないでもありませんが、多くの方がこの動画を視聴されることを信じて、このまま説教の奉仕をさせて頂きます。

さて、今私たちはとても不思議な形で「クリスマスしている」わけですが、最初のクリスマスはどのように「クリスマスしていた」のでしょうか。記念すべきクリスマス第一号は羊飼いたちによるものであったとルカ福音書は伝えていきます。羊飼いはその職業柄、ユダヤの社会で小さく弱くされた存在でした。ここに最初のポイントがあります。クリスマスは小さく弱くされた者に示されたということです。羊飼いたちは夜通しで羊の群れの番をします。いつもと同じ夜、深い闇、彼らには時代も社会も関係ありません。そんなある時、突然明るい光が羊飼いたちを照らしつけます。羊飼いたちは恐怖し、驚きます。ここにもポイントがあります。それは、光を受け入れられない人がいるということです。光を歓迎し、喜べるのは、心も体も健やかな人です。もちろん、クリスマスのイルミネーションを楽しみ、喜ぶことは悪いことはありません。ただ、羊飼いのようにクリスマスの光に恐れを憶え、その光を直視できない人もいるのです。

大きな混乱と動揺、悲しみがある時、私たちの心は疲弊し傷付いています。そのような状態では光を

光として受け止めることは難しいのです。この一年は新型コロナウイルス感染症によって私たちの生活環境は大きく変化し、混乱し、今なおその動揺はおさまりません。後輩である大学生の皆さんのことを思うと本当に辛い……。学生だけでなく東北学院の職員の方々も色々と大変だと思えます。その他にもこの動画を視聴しているあなた。あなたはどうか。コロナ禍にあって何も進展していない、何も解決していない、不安の苦悩が拭えないままにこの礼拝に連なっている人もいるでしょう。ですから、光に對する羊飼いたちの反応は他人事ではないのです。光を喜べない、光を直視できない現実があるのです。

この礼拝は動画配信ですから、パソコン、タブレット、スマホ等でご覧になっていらっしゃる方が多いでしょう。つまり、視聴方法の特質からして、多くの方は私と同様一人だということです。そうであるとすれば、羊飼いたちに語られた天使の言葉は大きな慰めと励ましとなります。天使は「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と語ります。ユダヤの民でありながら民として扱われず、共同体の外に置かれていた羊飼いに對して「民全体に」と語るのです。神さまの目には羊飼いやユダヤの民の一員なのです。他の誰が認めなくても、神さまが明確にあなたは全体の中の一人である、孤立してない、決して一人じゃないと教えて下さっているのです。その上で「あなたがた」という言葉が三度繰り返されます。「あなたがたのために」「あなたがたは」「あなたがたへの」と。他でもないあなたに、という神さまの熱意をここに見ます。誰の目にも留まらなかった、誰にも関心を抱かれなかった、そんな羊飼いを神さまは捉え「あなたがたのために救い主が生まれた」と告げるのです。クリスマスの喜びは他なら

ぬあなたのためにある、と告げられているのです。

天使のお告げを受けた羊飼いたちは「ベツレヘムへ行こう」「その出来事を見よう」と動き始めます。神さまの言葉を受けて心の奥底から力が湧き出てくるのです。御言葉を他人事としてではなく、自分に対するメッセージであると気付かされた者は、これまでにはない選択肢、決断、行動を与えられます。神さまの言葉は人を変えるのです。羊飼いたちは旅立ち、乳飲み子を探し当てます。「探し当てた」と聖書は記していますから、羊飼いたちの冒険は簡単なものではありません。それでも彼らは天使に告げられた神さまの御言葉に従ったのです。最初のクリスマスの舞台は、清潔でも快適でもない家畜小屋の片隅です。救い主はエサ箱に寝かされています。世界の片隅で人知れず僅か数名によってささげられた小さなクリスマスが今や世界中で祝われているのは、羊飼いたちが伝えたからです。自分たちに示された光を、恵みを、喜びをポケットにしまい込むことなく、人々に伝えたからです。繰り返しになりますが彼らは羊飼いです。人々に声をかけたらどんな目に遭うか、何をされるか分かっています。嫌な顔をされるでしょう、無視されるでしょう。それでも伝えずにはいられないのです。これがクリスマスの恵み、喜びなのです。喜びの連鎖が起こるのです。今回、この連鎖のきっかけを担うのは、この動画を視聴するあなたです。あなたがこの喜びを伝えるのです。

最後に、聖書は羊飼いたちの帰宅を描きます。これも重要なポイントです。彼らは帰りました。彼らには羊飼いとしての現実が待っているのです。救い主が与えられても、彼らを取り巻く環境は変わりません。私たちも同じです。この礼拝動画を視聴し終えたら、その瞬間に圧倒的な現実を引き戻されま

す。環境や状況は変わりません。しかし、羊飼いたちは自己認識が大きく変えられました。自分は救いの外に置かれた者でもない、神さまの救いの内に入れられ、キリストを礼拝する者に変えられたのです。私たちも同じです。不思議な形ではありましたが、ここにはっきりと救い主のご降誕を、その恵みと喜びを共有しました。コロナ禍にあっても私たちは東北学院公開クリスマスによって「クリスマスした」のです。

あとがき

東北学院宗教センター編『東北学院礼拝説教集（水のほとりに）』第一号を上梓することができたことを嬉しく存じます。原稿を寄せてくださった方々に心より御礼申し上げます。これから幼稚園から大学までの各学校の礼拝での説き明かしを掲載することで、それぞれの礼拝をより親しみのある、身近なものとして皆様に受け止められることを切に願っています。

「発行にあたって」で大学礼拝の説教集が二四号まで続いたことに触れましたが、実際、大学生たちが手にしたこれまでの説教集に対する印象は、装丁も内容も硬く、難しいという声が少なからずありました。しかし内容に関しては、聖書の教え自体が深く豊かなので、それぞれの経験と知識を通してよく考えないとわからない部分が少なくないと言えます。さらに説教が理解しやすいか否かは個人差もあり、簡単に判断できるものではありません。しかし、手に取って読みたくなるような装丁や、出来るだけ分かり易い内容を提供することはこれからも鋭意努力していく必要があります。本書が誰にでも身近な説教集となることを期待しています。

御言葉の水は 疲れを癒して

新たなる命 与えて尽きせじ
（『讚美歌』二八六番四節）

東北学院礼拝説教集

第一号

二〇二二年四月一日発行

発行責任者

院長・学長・宗教センター所長

大西 晴樹

編集責任者

宗教部長・宗教センター主任

野村 信

印刷・製本

株式会社 阿部 紙工

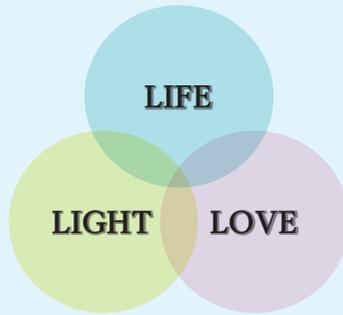
問い合わせ先

東北学院宗教センター

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一―三―一

☎〇二二・二六四・六五五八



東北学院礼拝説教集 第1号